

# 湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学  
所 属 保健医療学部リハビリテーション学科  
名 前 杉村直哉  
作成日 2025 年 5 月 28 日

## 1. 教育の責任

本資料作成者である杉村直哉(以下, 作成者)は, 本学において, 以下の教育活動を担当している. 授業のシラバスについては, 湘南医療大学 WEB ポータルサイト上で本学学生並びに教職員に公開されている.

### □科目責任者

| 科目名                    | 開講    | 必修・選択 | 履修者数   | 時間数    |
|------------------------|-------|-------|--------|--------|
| 作業技術学 I (レクリエーション・革細工) | 1 年前期 | 選択    | 約 10 名 | 30 時間  |
| 作業療法評価学概論              | 1 年後期 | 必修    | 約 40 名 | 7.5 時間 |
| 作業療法評価学(精神)            | 2 年前期 | 必修    | 約 40 名 | 30 時間  |
| 精神障害作業療法学 I (総論)       | 2 年後期 | 必修    | 約 40 名 | 30 時間  |
| 作業療法特論 II (精神障害)       | 4 年後期 | 選択    | 約 40 名 | 15 時間  |

### □一部担当科目

| 科目名         | 開講    | 必修・選択 | 履修者数   | 単位数    |
|-------------|-------|-------|--------|--------|
| 作業療法概論      | 1 年前期 | 必修    | 約 40 名 | 1.5 時間 |
| 作業療法理論      | 3 年前期 | 必修    | 約 40 名 | 1.5 時間 |
| 作業療法研究法     | 3 年前期 | 必修    | 約 40 名 | 3.0 時間 |
| 作業療法研究法演習   | 3 年後期 | 必修    | 約 40 名 | 3.0 時間 |
| 作業療法評価学総合演習 | 3 年後期 | 必修    | 約 40 名 | 1.5 時間 |

### □実習・演習

実習系科目: 見学実習(1 年後期), 地域リハビリテーション実習(3 年前期),  
評価実習(3 年後期), 総合臨床実習 I・II(4 年前期)  
臨床技能: 客観的臨床能力試験(OSCE)

### □その他

学生支援委員会委員(2025 年度～)

上記に示す通り, 作成者は授業科目の担当を通して, 作業療法学専攻学生の入学から卒業までの教育に一貫して関与しており, その責務の重さを認識している.

担当する授業の中では, 特に「作業療法評価学(精神)」と「精神障害作業療法学 I (総論)」の 2 科目が, 精神障害作業療法学の専門知識・技能教育の根幹を成している. これらの授業では, “ひとを理解し, 援助すること”の基本的な姿勢や心構えを伝え, 評価から介入までの作業療法実践の標準的なプロセスに沿って, 国家試験にも対応できる知識を幅広く網羅することを重視している. また, 臨床実践に結びつくような「体験学習」として一部に反転授業(アクテ

ィブラーニング)の要素を導入し、学生が興味をもって主体的・能動的に学びを推進していける工夫をしている(教育方法で後述)。

実習系科目では、実習に臨む学生の課題を明確化し、学生個々の経験値や成長度合いに応じた指導を行っている。実習中の体調管理に対するフォローも教員の重要な役割であると認識している。

2025 年度より、大学運営として学生支援委員会の委員を務めており、学生教育の質の向上に対する重要な役割を担っている。

## 2. 私の理念・目的

### 1) 私の理念

大学の役割とは「教育」と「研究」だと考える。

作業療法という医療・福祉のフィールドは対象者がいて初めて成り立つ分野であるゆえ、「教育」では知識や技能の習得のほかに、人と人とのコミュニケーションや社会性を豊かに育むという視点が欠かせない。人と出会い、人をどのように理解し、人との関係性のなかで自分はどのように行動すればいいのか、という機微を体得するためには、学生相互の実体験を基盤とした学習が特に重要と考える。この過程を経て、学生は、自身の大学生としてのアイデンティティと、新たに習得する職業人としてのアイデンティティとを無理なく統合し、等身大の自己像を形成していく。その意味で、教育にとって、「何を学ぶか」と同じくらい重要なのが「誰と出会うか」だと考えている。そのなかで教育者(教員)は、学生にとって、まず信用に足る人間であって、さらに魅力的な臨床家でなければならないと感じている。これを伝える手段は授業だけでなく、自由な雰囲気の中での人間的な対話が重要である。学生が様々な交流(学生間、教員、学科・専攻間)を経験し、知見を拡げていけるような教育環境面への視点を常に持ち続けていきたい。

また、大学に対する対外的な評価や期待の大部分が「研究活動」にあることも認識する必要がある。大学教員は研究者でもあり、研究を世に問うことを通して、自分の行っている仕事が社会に還元されることを強く意識するが、その気概を学生にも伝えていくことが作業療法分野の職域発展と人材育成につながると考えている。研究が楽しいものであるということを、身をもって示していくことも教育に携わる者の使命であり、教育と研究の両輪を機能させていくことが、それぞれの効果を高めることになる。

### 2) 理念をもつに至った背景

学生にとって最初に出会う身近な“作業療法士”が大学(養成校)の教員である場合が少なくない。学生時代の得た知識や技能は、それを教授した教員に重ね合わせて心に刻まれる。

自分自身を思い返してみても、恩師から受けた教育は、その後の私の作業療法士としての歩みにずっと影響し続けており、大事な核となっているという感覚がある。大学での学びは時間にすればわずか4年間であるかもしれないが、ここで得た職業人としてのアイデンティティ確立の礎は生涯残り続けるものであると思う。

これからの作業療法の領域では、国民全体の健康に資するための研究がより重要視されていく。その際に重要なことは、個人的な経験則からアウトプットすることではなく、エビデンスを根拠とした実践を積み重ね、高い倫理観と課題解決能力をもつ人材を育成していくことである。作成者が身近に接する学生との関わりが、将来の作業療法学の発展につながるという視点をいつも心に留めながら、大学教育に携わっていきたい。

### 3. 教育の方法・戦略

科目責任者となっている「作業療法評価学(精神)」と「精神障害作業療法学Ⅰ(総論)」で実践している教育方法とその戦略的意味を記す。

#### 1) 反転授業の実践

反転授業はアクティブラーニングの一技法として位置づけられ、従来の「授業で教示したあとに復習させる」というスタイルではなく、事前に学習課題を提示することで準備・予習をさせ、授業ではより実践的な内容を取り扱っていく。基本事項の説明に多く時間を割く必要がなくなり、専門職としての面白さや奥深さに直結する、より実践的・専門的な知識や技能に多くの時間を割けるというメリットがある。このことにより、学生にとっても主体的な学びが促進されやすいと考えられる。

上記の科目で実際に実践している内容は以下の通り；

- ・学生ごとに授業で取り扱う単元を事前学習課題として提示
- ・担当の学生は、提示された課題を授業の前に実施し、レポートを作成
- ・課題の援助が必要な場合、学生ごとに教員が研究室などで個別フォロー
- ・授業ではレポート発表に基づいて質疑応答や教員からフィードバックを実施
- ・授業後、担当以外の他の学生は、授業で取り扱われた課題を自らも実施
- ・このようなサイクルで授業が展開していき、すべての学生が全課題を自ら経験
- ・授業最終回で全体総括

#### 2) 相互協力学習による実体験の重視

作業療法の技能やリーズニングは、対象となる人のために存在する。つまり、知識の教示だけでは実際には使い物にならないことが多い。大切なのは実践力であり、それは自ら経験していくことでしか習得できない。

上記の科目では、学生ペアで実物の評価法や介入方法を互いに実施する。学生の試料を学びの教材に用いることについて、心理的安全性を保障するために、オリエンテーションを丁寧に行う。内容は以下の通り；

- ・相互協力が絶対不可欠であること
- ・単なる“作業療法ごっこ”ではなく、友達であっても“馴れ合い”は厳禁であること
- ・ヒトのことを知ることは、それなりの重みがあり、それを受け止める覚悟が必要であること
- ・知り得たペアについての情報は、相互協力学習に資する目的でこの授業の中だけでクラスメイトに共有されること

### 3) ICT の活用

オープンチャット機能を用いて、授業中に、学生には自身のスマホ・タブレットからチャットで自由に発信(質問・意見・感想)してもらい、教員も含めた履修者全員で共有するという試みを行っている。

質問や意見を即座に発信できるため授業中のインタラクションが増える、口頭で発言しにくい学生もチャットなら気軽に参加できる、他の学生の質問や意見を見て新たな視点や気づきを得られる、といったメリットが実感される。また、学生の疑問やつまずきポイントをリアルタイムで把握し、授業内容を柔軟に調整できる、よく出る質問をまとめて回答することで個別対応の負担を軽減できる、等の利点がある。

## 4. 学習成果

授業評価アンケート結果より;

- ・「意欲」「理解」「自発的」「探求」「熱意」「教え方」「コミュニケーション」「板書」「環境」「総合」の項目で平均 5.0、「向上」の項目で平均 4.8 だった。
- ・勉強時間にはばらつきがあったが、3 時間以上と回答している学生も存在した。
- ・自由記載:「授業の形式が、各項目を担当させて生徒に発表させるもので、とても興味が湧いたし、発表のシステム自体もとても愉快なものであった。このような授業のスタイルだと、受けていて楽しいし自動的に興味の湧くものだと感じた」

以上のことから、作成者が授業を通して学生に教示している意図や狙いは、学生に十分伝わっていたのではないかと考えている。

## 5. 改善のための努力

- ・反転授業は主体的な学びを促進することができるが、学生・教員ともに負荷の高い授業形式でもあるため、課題の難易度や量についてはさらなる検討が必要
- ・クラス 40 名分の課題遂行状況を把握することは難しく、遅れがちになる学生に対するフォローアップ方法の確立が課題
- ・反転授業の効果を数値的に図ることは難しく、今後さらなる精査が必要
- ・オープンチャット活用は、運用のルールなどを明確にすることが必要

## 6. 今後の目標

### 1) 長期目標

- ・学生が、在学中に学んだ知識と技能を基にして、卒後の臨床現場で存分に活躍できるようになること
- ・研究マインドをもつ卒業生を輩出すること
- ・作成者自身のアクティブラーニングの技能を高めていくこと

## 2) 短期目標（～2026年度後期）

- ・担当する科目すべてにおいて臨床実習や国家試験に紐づく知識や技能を教示すること
- ・学生の疑問を大切にし、疑問を解決していく手段が身につけられるよう支援すること

### 【添付資料】

資料 1: 杉村直哉. 2025 年 4-5 月全体研修会 スライド資料.

資料 2: 杉村直哉. 作業療法評価学(精神) 初回授業オリエンテーション配布資料.

学生が主体的に学べるための理解しやすい授業の工夫

# ～反転授業・ICT活用による相互学習促進の試み～

リハビリテーション学科 作業療法学専攻

杉村 直哉

# 背景

- 休・退学者の増加が問題となる理由

学習意欲の低下

学力格差

孤立感

職業アイデンティティの未確立 → 専門職養成大学に特有の要因

## 課題

- 休・退学者の減少を目指すためには、専門分野の学問としての面白さを伝え、学生が主体的に学べる環境を整えることが必要

➡「授業」は教員の裁量で工夫できる最も身近なアプローチ



# 反転授業の概要

- 反転授業とは？

概念:「事前学習 + 授業内での実践的な活動」

- 従来の授業との違い

伝統的な講義形式 ➡ 授業で基本事項の説明に多くの時間を要する  
受動的な学習、理解度のばらつき、関心の低下が問題となる

反転授業形式 ➡ 授業では応用・発展的な内容に多くの時間を割ける  
実践的・専門的な技能を教示しやすく、モチベーションが向上する  
学習定着率向上、主体的な学びの促進につながりやすい

# 私の実践内容

「作業療法評価学」において

- 学生ペアごとに、事前学習課題(評価)を提示
- 学生は提示された課題を授業前に実施し、授業レポートを作成
- 課題の遂行で困った際には教員のオフィスアワーなどでフォロー
- 学生は授業内でレポート発表を行い、質疑応答と教員からのフィードバックを実施
- 授業後、担当以外の学生は、授業で取り扱われた課題を自ら実施
- すべての学生が全課題を経験することになり、最後に一連の評価報告書が完成
- 授業の最後に報告会を実施

# 意識して学生に伝えていること

- ペアで実施していくため、相互協力が絶対不可欠であること
- 単なる「評価ごっこ」ではない。友達であっても“馴れ合い”は厳禁！
- ヒトのことを知ることには、それなりの重みがあり、それを受け止める覚悟が必要であること
- 評価の過程で知り得た被検者(ペアの相手)についての情報は、相互学習に資する目的でこの授業の中だけでクラスメイトに共有されること
- 以上のような相互協力と約束が、心理的な安全性を保証し、学修の質を高めること

# 学生の声

- 授業アンケートでは、「意欲」「理解」「自発的」「探求」「熱意」「教え方」「コミュニケーション」「板書」「環境」「総合」の項目で平均5.0、「向上」の項目で平均4.8であった。
- 勉強時間の平均が3時間以上の学生がいた。
- 自由記載では、代表的な意見として、「授業の形式が、各項目を担当させて生徒に発表させるもので、とても興味が湧いたし、発表のシステム自体もとても愉快的なものであった。このような授業のスタイルだと、受けていて楽しいし自動的に興味の湧くものだと感じた」というものがあった。

➡科目担当者が意図するところは学生に伝わっていたと考える

# ICT: オープンチャット活用の試み

- 昨年度、オムニバス形式の授業で、LINEオープンチャット活用
- 講義形式の授業において、学生には自身のスマホ・タブレットから自由に発信(質問・意見・感想)してもらい、教員も含めた履修者全員で共有する。
- 考えられるメリットは、①質問や意見を即座に発信できるため、授業中のインタラクションが増える、②口頭で発言しにくい学生も、チャットなら気軽に参加できる、③他の学生の質問や意見を見て、新たな視点や気づきを得られる
- 教員側としても、学生の疑問やつまずきポイントをリアルタイムで把握し、授業内容を柔軟に調整できる、よく出る質問をまとめて回答することで個別対応の負担を軽減できる、等の利点を感じた。

# 課題と今後の展望

- 反転授業は主体的な学びを促進することができるが、学生・教員ともに負荷の高い授業形式でもあるため、課題の難易度や量についてはさらなる検討が必要
- クラス40名分の課題遂行状況を把握することは難しく、遅れがちになる学生に対するフォローアップ方法の確立が課題
- 反転授業の効果を数値的に図ることは難しく、休退学者の減少にどの程度寄与できるのか、今後さらなる精査が必要
- ICT活用としてオープンチャットを用いる試みは今後も続けていきたいが、運用のルールなどを明確にすることが必要

# まとめ

- 休・退学者の減少には、授業において専門職としての面白さを伝えていくことが必要であり、その取り組みのひとつとして、反転授業の実践について報告した。
- 反転授業は、応用・発展的な内容に多くの時間を割くことができるため、学生にとってモチベーション向上、主体的な学びの促進につながりやすく、職業的アイデンティティ確立に寄与すると考えられた
- このような反転授業の実践と休退学者の減少の関連については、今後さらに検討していく必要がある

## 作業療法評価学(精神)

第1回 オリエンテーション

### この授業の目的

- ヒトを理解する心構えと基本的な技法を学ぶ
- 作業療法の対象となる人(特に精神障害、メンタルヘルス不調)のさまざまな評価技法について、実際に体験することにより主体的に学ぶ
- 評価内容からヒトの全体像をまとめて報告する
- 「検者―被検者」「評価する―評価される」という体験を通して、自身の特性(強み・弱み・認知パターンなど)を理解し、作業療法における重要な治療要因となる「自己の治療的利用(the therapeutic use of self)」について体得する。
- 国家試験の問題に解答できる知識を身につける

(2023) 作業療法士国家試験 第58回 午前 より

48 11 種類の筆記検査と 4 種類の器具検査から 9 つの適正画を測定し、満点を巧味することが出来る職業評価はどれか。

1. GATB
2. MODAPTS
3. マイクロタワ―法
4. ワークサンプリング強版
5. 内田タレバリン精神検査

(2023) 作業療法士国家試験 第58回 午前 より

42 「833」のような数字の順を口頭で提示し、提示した数を小さい順に答えさせようとしたところ、順番を間違ったり回答できないことがみられた。

この患者の症状として考えられるのはどれか。

1. 見当識障害
2. 意味記憶障害
3. 言語流暢性障害
4. 巧緻運動機能障害
5. ワーキングメモリの障害

(2023) 作業療法士国家試験 第58回 午前 より

89 統合失調症患者の健康関連 QOL の測定に用いることができるのはどれか。

1. BPRS(Brief Psychiatric Rating Scale)
2. NEO-PI-R
3. RDQ(Reid-Morris Disability Questionnaire)
4. SF-36
5. SFS(Social Functioning Scale)

(2023) 作業療法士国家試験 第58回 午後 より

28 対象者に直接、満足度を問うことができるのはどれか。2つ選べ。

1. AMPS
2. COPM
3. QSA II
4. MTDLF
5. NPI 興味チェックリスト



(2023) 作業療法士国家試験 第58回 午後 より

40 検査法とその方法の組合せで正しいのはどれか。

1. BPPS ——— 自記式質問紙
2. GAF ——— 半構造化面接
3. HTP ——— 構造化面接
4. Rehab ——— 行動観察
5. SDS ——— 聴取法

(2023) 作業療法士国家試験 第58回 午後 より

42 統合失調症の認知機能を評価するために用いるのはどれか。

1. AIMS(Abnormal Involuntary Movement Scale)
2. BACS
3. LASMI
4. PANSS
5. SAPS(Scale for the Assessment of Positive Symptom)

## 授業の予定

- 全15コマ
- 月曜日 2限(講義室10)
- ※注意:いくつか時間割変更あり
- ※詳細は別紙の「授業スケジュール表」をご覧ください

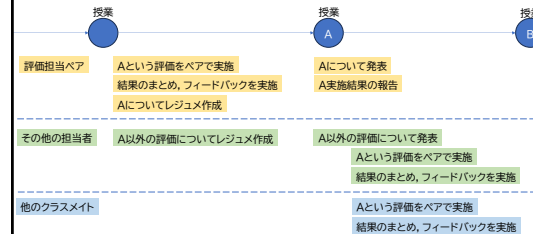
## 授業の進め方

- この授業では、約3か月間、クラスメイトでペアを組み、互いに評価を実施し、結果のまとめ(解釈)、フィードバックを繰り返していきます。
- 授業の各セッション(第3回～第11回)の担当を決め、担当者はあらかじめ指定された評価※1を実施し、結果や解釈について授業で報告します。それ以外の評価※2についても評価の概要や実施方法について調べ、レジュメを作成し、発表してもらいます。
- 担当以外のペアは、授業後に指定された評価を実施し、結果のまとめとフィードバックを実施してください。

※1 指定された評価とは; 授業スケジュール表で太字の項目

※2 それ以外の評価とは; 授業スケジュール表の太字ではない項目

## 具体的なイメージ



## 授業の準備について

- 担当ペアには評価用紙、評価キットを先に渡しますので、打ち合わせを兼ねて杉村研究室に来てください。
- レジュメ(印刷1部)は、グループごとにまとめて、表紙・目次をつけ、授業前日の12時までに杉村研究室ポストに入れてください。
- 担当以外の皆さんには、使用する評価(\*マーク)は、授業の各回で配布します。
- 授業中の机配置はミーティング形式で実施します(授業前にセッティングをお願いします)
- レジュメを作成する際に、できるだけ多くの文献を参照してください。
- 図書館に蔵書していない書籍、入手できない文献がある場合は貸し出しますので、相談してください。

### 評価実施についての留意事項

- 評価を実施する際には、可能な限りプライバシーが守られる静かな環境を設定する
- 実際の患者さんに実施することを意識した服装・言葉遣いを心掛ける  
単なる「評価ごっこ」ではない。友達であっても“馴れ合い”は厳禁！
- 被検者からの評価情報(試料)は極めて大切に扱う

### 最終回

- 最終回(第11～15回)は4コマ連続で実施します。
- この授業内で蓄積してきた面接・観察・評価結果から、ペアの相手について「どのような人なのか」というテーマで報告をしてもらいます。  
※もう少し詳しい項目立ては次回の授業で説明します。
- 発表時間10分
- 発表レジュメを作成  
(検査や質問紙の結果原本もファイリングして用意しておく)

### この授業の約束

- ペアで実施していくため、相互協力が絶対不可欠。
- ヒトのことを知ることに、それなりの重みがあり、それを受け止める覚悟が必要。「知る」ことによって、もしかすると、自分自身の感情が揺さぶられたりすることがある。その時に意識してほしいことは、自身の感情を客観的にモニタリングすること。
- 評価の過程で知り得た被検者(ペアの相手)についての情報は、相互学習に資する目的でこの授業の中だけでクラスメイトに共有される。
- つまり、授業以外の場所で、「Aさんって、〇〇なんだって」と情報を漏洩することはないこと。
- 以上のような相互協力と約束が、心理的な安全性を保障し、学修の質を高めます。

### いつでも・こまめに 相談を

- 評価の実施方法や解釈、文献の入手方法、あるいは人間関係のこと、自身の体調のことなど、この授業に関わる事項は、遠慮なく、いつでも・こまめに ご相談ください。
- 「相談すること」は、それ自体が物事への対処能力を育む大切な体験になります。それは臨床(あるいは実習)で使える「強み」になります。

### 使いやすい参考書



### 成績判定について

- 授業への主体的な参加姿勢、課題遂行の内容、最終報告会での発表内容によって、総合的に成績を判定します。
- よってペーパー試験は実施しません。
- 授業の出席が規定日数に満たない場合には単位認定できません。

### 今日のタスク

- ① 3か月間、相互評価を行うペアを決めます
- ② レジュメ報告を担当する授業回を決めてください
- ③ 担当する授業回の中での役割を決めてください